

上野 覚（岡山県工業技術センター）

1. はじめに

地域が持続的に発展していくための産業構成やものづくりのあり方・方向性について検討を進めている。地域が経済的に豊かになるためには、通常、地域の産業構造を、市場が拡大している産業、付加価値率が高い産業へと移行させ、収益の拡大を図ることとなる。昨年は、生産額の面から見た成長産業である ICT や輸送機械に係る企業の誘致・集積・連携施策が投資対象として有効であることを報告した。しかし、この経済成長モデルは、需要主導型の経済基盤モデルであり、基本的に外需に強く依存していくことから景気変動の波を受けやすく問題と思われる。また、当該地域で生活している住民が抱えている「地域の将来あるべき姿」からの視点も重要である。

このような観点から、本研究では、安定的需要が見込める内需型産業を組み込みバランスのとれた産業構造の構築を目的とし、①目指すべき岡山県の姿、②今後の成長産業（付加価値率）、③外需の影響を受けにくい産業、の3つの視点から域内の経済循環において核となる産業を検討した。②、③については岡山県産業連関表を活用して、岡山県の産業構造を分析すると共に経済効果の検討を行った。

2. 方法

2.1 域内の経済循環において核となる産業の候補

3つの視点の内、①の目指すべき岡山県の姿については、岡山県が2011年度に夢づくりプラン策定にあたって、県内在住の男女2500人を対象に行った県民意識調査結果から検討した。②、③については平成17年度岡山県産業連関表を用いて、産業別粗付加価値率や県際構造から域内の経済循環において核となる産業の候補を選定した。

2.2 選定した産業の経済効果

選定した産業について、岡山県統計調査課が作成した経済波及効果測定ツールを用いて、新たな需要(100億円)が発生した場合の経済効果を計測し、県内の主要な産業である輸送機械や鉄鋼と比較した。

3. 結果

3.1 域内の経済循環において核となる産業の候補

①の岡山県民が最も期待している目指すべき県の姿は、医療・福祉サービスの充実(75%)であった。②の付加価値率は、生産活動によって新しく生まれた価値の割合を示し、総じて製造業で低く、サービス業で高い傾向であった。モノの需要が経済を牽引する時代から、アップルの例にみられるよ

うにビジネスモデルを駆使することで収益を確保する時代に移行していることが分かる。③の内需型産業は、第3次産業の多くが該当し、特に医療・福祉サービスは移輸入率0%である。以上、①②③から域内の経済循環において核となる産業の候補として医療・福祉サービス産業を選定した。

3.2 選定した産業の経済効果

医療・福祉サービス産業の県内経済に及ぼす効果は167億円、また雇用効果は1579人で、この効果は県の主要な産業である輸送機械と比較して経済効果で2.6倍、雇用効果においては4.7倍、また鉄鋼と比較して経済効果で1.2倍、雇用効果においては5.3倍であり、当該産業は、県内の経済循環において核となる産業として相応しいことが分かった(図1、図2参照)。このような状況における経済成長モデルとしては、グローバル化の活用による生産性向上と共に、対外資産からの所得収支を域内で循環させるモデルが有効と考えられる。実際に2005年以降、日本の所得収支黒字は貿易収支黒字を上回っている。

4. まとめと今後の展望

目指すべき県の姿として岡山県民から最も期待されている医療・福祉に係る産業は、有望な成長産業で経済・雇用効果も大きく、県内の経済循環において核となる産業として相応しいことが分かった。岡山県では医療・福祉系大学も多いことから、今後産学官で連携し、快適生活県岡山の実現に向けた取り組みが望まれる。

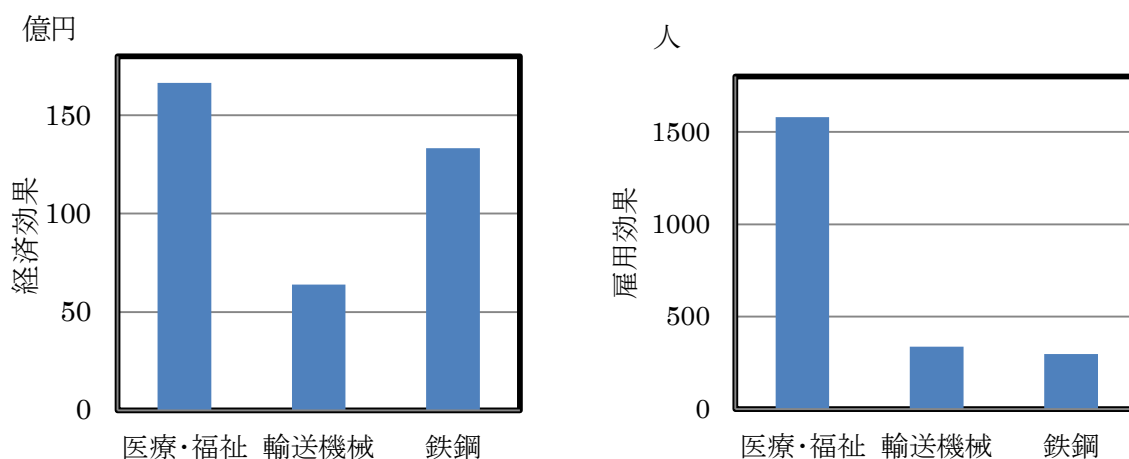


図1 新たな需要(100億円)が発生した場合の経済効果 図2 新たな需要(100億円)が発生した場合の雇用効果